

●平成18年度／資源保全施策に関する地域リーダーのための人材育成研修（全国）

農工研
テキスト
04

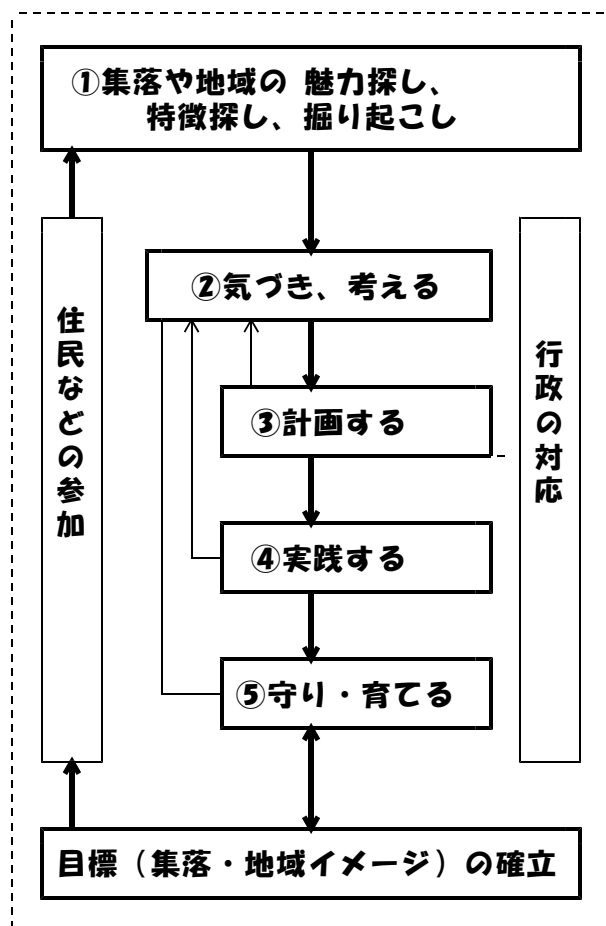
ファシリテーターのための 資源保全プログラム 作成要領

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

農村工学研究所 ● チーム「田援」

0. 地域づくりのプロセス

●進め方



ステップ		概要
①	地域状況の把握 特徴探し 魅力探し 掘り起こし	・ 各県、各地域によって、農業・農村を取り巻く状況はかなり異なると思われます。従って、地域性や営農形態の把握は不可欠の要素となります。また、ブロック毎の対応も必要かも知れません。そうした状況を踏まえて、プログラムの作成に取りかかります。
②	気づき、考える	・ まずは、現在抱えている問題点や今後発生するだろうと思われる課題の存在に気づいてもらうことが必要です。そのためには、どのような仕掛けが効果的かを考えましょう。 ・ その上で、「何かをしなければ！」を考えることができるようなプロセスが効果的と思われます。
③	計画する	・ そうした意識を惹起させつつ、「じゃ、こんな事を考えてみよう」といった問いかけと、「先を見た計画づくり」に向かわせます。しかし、地区・集落の熟度はまちまちです。 ・ しかし、どのような熟度のステージからでも対応できる展開方法を用意しておくことが重要です。その上で、徐々に熟度を高め、当該領域全体の合意に結びつけていく展開が望まれます。活動の波及効果を意識した展開を考えましょう。
④	実践する	・ 計画づくりと同様の展開が必要です。核となる組織の活動を通じて、その波及効果を期待し、更に地区・集落全体の活動に広げていく展開を考えましょう。
⑤	守り・育てる	・ こうした活動を等して、地域・集落の生産資源・環境資源を、守り・育て、後世に継承していくエネルギーを培いましょう。またそれに向けた、新たな活動も育みましょう。

1. 地域状況の把握（地域の特徴、魅力等の掘り起こし）

（1）各県・地域の農業の現状と課題

（状況に応じて、全国比較、県内地域比較、集落間比較を考える）

- 1）人口・世帯数の推移
- 2）農家・非農家戸数の推移
- 3）世代別にみた農業就業人口の推移
- 4）耕作放棄地の推移
- 5）生産状況の推移

等々

- ・上記、項目などを図化するなどして、県や地域～集落の状況を知らしめ、今後、何らかの手だてを講ずる必要のあることを認識させる。

（具体的には、高齢化の進展や農業後継者の減少等々で、地域・集落機能の低下が著しいことを理解させる）

（2）地域～集落の農業形態の現状と課題

- ・地域に卓越する農業形態と、それに伴う課題や今後の方向性の検討
- ・こうした状況が、社会生活そのものに影響を与えており、社会環境の維持・管理が不可欠であることを整理する。

（3）魅力等の掘り起こし

- ・そうした状況にある反面、地域には歴史が培った様々な文化資源等が存在している。このことが、住民の定住に大きく寄与していること等を整理する。
- ・また、これまで地域を維持・管理していた住民の繋がりや慣行等を整理し、今後の地区や集落の日常管理に活用できることの確認。

（4）その他、地域の個性を表す事象等の整理

- ・当該地域、地区の個性（長所、短所）を分かり易く整理

可能な限り、数字や図に置き換えて整理する

2. 気づかせ、考えさせる（オピニオンリーダーのアクション）

（１）気づかせるための仕掛けを考える

- 1) 事例地を参考として紹介する。
 - ・優良事例地の実態とその背景（活動の実態と効果）
 - ・失敗事例地の実態とその背景（活動の実態と効果）
 - ・優良事例地の見学会をする。
- 2) 色々な人の意見を聞く
 - ・イベント（シンポジウム等）の開催
 - ・講演会の開催
 - ・年齢階層別の座談会
（特に、高齢者、子供たちの声を聞く）
 - ・実践者の声を聞く
- 3) 自らの地域・集落の実態を知る
 - ・他地域・集落と比べてみる
 - ・実際に歩いて、見て、状況を知る
 - ・10年後、20年後の将来を予想してみる。

（２）考えるための素材を提供する

- 1) 周辺社会環境の経年的変遷過程を提供する
 - ・人口動態、世帯数の変遷過程（数字）
 - ・環境変遷の実態（航空写真、住宅開発等々）

2) 生態系の変遷実態

- この傾向線の行く末は？これで良いのか？

3. 計画する（リーダーを中心に、住民を巻き込むために）

その1：契機づくり

（1）身近な問題を取り上げる

1）我が家の教育実態と子供たちの反応
「子供は家庭の鎧（かすがい）」と同時に「地域の鎧？」

2）大人のためでなく、子供たちの将来に向けて！

3）日常生活活動内で考える！

（2）既存組織等を活用する

1）まずは、自治組織を考える

2）動きのある組織を活用する

3）有志を募る

（3）そして、まずは具体的展開へ

その２：計画づくりと合意形成

- | | |
|---|--|
| <p>(１) 多様な主体の参加を促す。</p> <ul style="list-style-type: none">・女性の参画は不可欠・年齢階層別の参加者の確保を・地域～集落外の方の参加も促す。 <p>(２) まずは現状を分かり易くまとめる</p> <ol style="list-style-type: none">１) 数字や文章より、絵や図面としてまとめる。２) 皆さんに分かり易く整理する。３) いろんな方に見てもらい、中身を充実する。
(参加者だけでなく、広報等を通じて意見やアイデアを集約)４) その他、効果的な手段も考える。 <p>(３) 現状を踏まえて、「では、どの様にするか」を考える。</p> <ul style="list-style-type: none">・(２)と同様の展開を図る。 <p>(４) 管理・運営の役割分担を考える。</p> <ul style="list-style-type: none">・当面は、参加者内での対応で良いが、徐々に賛同者を広げ、幅広い参加者(組織も含む)を募り、計画そのものを関係領域内全体のものとして位置づけるようにする。 <p>(５) そして合意形成へ</p> <ol style="list-style-type: none">１) 参加者の合意は勿論であるが、より広く関係者の賛同を仰ぐ
(参加者の合意から、関係者の合意へ)２) 最適解ではなく、納得解としての位置づけを | |
|---|--|

4. 実践する（実践の輪を広げる）

- （１）多様な主体の参加（共同作業）を促す。
 - １）女性の参画は不可欠
 - ２）年齢階層別の実践を考える
子供でもできること、高齢者でもできること等々
 - ３）地域～集落外の方の参加も促す。
 - ・ N P O や他の応援団も募る

- （２）年度別計画を立て実践する。

- （３）計画の見直しを図る。

- （４）成果を公表する。
 - ・ 活動実績の公表は、まとめ意識の高揚にも繋がる。
 - ・ このことは、更なる参加者の拡大の繋がる。

5. 守り、育てる（活動成果を評価し、更なる共同活動を働きかける）

（1）活動結果を色々な方に評価してもらう

- 1）当該領域内の属性別評価
（年齢別、性別、職業別等々）
- 2）当該領域外の第三者評価
- 3）その他の評価

（2）評価に対して謙虚に対応

- 1）属性別感想
- 2）全体的総括

（3）今後の展開の検討

- 1）継続的活動の推進
- 2）新たに気づいた展開方法

（4）次のステージに向けて

6. 研修プログラムの作成（市町村職員、オピニオンリーダーを対象にして）

■ 研修プログラムの作成に当たって

- ・ 研修生諸氏は、今回の研修を受講し、その経験を生かして地元で同様の研修を実施することとなります。
- ・ 今回の研修で、「有効に機能するであろう点」、また「全く活用できないと思われる点」等々、色々な評価があると思われます。
- ・ そうした評価をもとに、地元での研修プログラムを作成して下さい。

■ 研修プログラムの作成条件

- 1) 当事業を効果的に実践するに当たって、地元の状況を勘案し、有効に機能する研修プログラムとすること
- 2) 1泊2日以上の日程とすること（丸一日以上は、確保すること）。時間の使い方は、問わない
- 3) 事業の「あり方（主旨等々）」の説明時間を確保すること。今回の資料のどれを採用し、どの様に説明するか、を具体的に示す。
- 4) 合意形成を図る手法を習得できるようなプログラムとすること。WS手法は合意形成には有効に機能すると思われるが、それが全てではない。当然、他の手法であっても良い。要は、事業を効果的に展開させるための方法を明記する。また、どの様な資料を作成するかも明記。
- 5) 研修資料作成に当たっての準備作業や役割分担も考えること。準備にどの程度の人数と時間を必要とするかも予想すること。